

想起 ―― 礼拝における学び

市瀬英昭（南山短期大学講師）

「今日わたしが命じるこれらの言葉をこころに留め、子ども
たちに繰り返し教え、家に座しているときも道を歩くときも、
寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせなさい」
（申命記 6、6-7）

人間は忘れる生き物であり、あることを忘れないためには、それなりの工夫
や努力がいる。単に忘れないためだけでなく、ある体験を振り返り、そこから
何かを学びとり、生かそうとするならば、「思い出」にひたるとい意味では
なく、また、機械的な「記憶」とも異なる次元の「想起」が必要となろう。

ユダヤ・キリスト教は歴史宗教であり、その源泉はある歴史的な出来事にあ
る。過去の特異な一点に排他的に撤し、その点を突破することでかえて普遍
性を獲得する、というのがこの宗教の基本的な構造であるといえよう。その意
味で「真理は肉に宿るが肉に束縛されることはない」（宇田達夫）とは言える。
さしあたり、この公理の前半が真剣に受け止められるか否かがユダヤ・キリス
ト教にとり死活問題である。換言すれば、過去において神が人間の歴史に介入
したとされる出来事の想起がいかになされるかが重要となる。

旧約聖書において、想起の対象はいくまでもなく第一に「エジプト脱出」の
出来事である。強大国エジプトからのモーセによる解放という歴史的事件の中
に彼らは自分たちの神の「力強い腕と手」とを見た。そうしてこの歴史的体験
が自らの歴史を由来、現在そして将来として解釈させ、それを生きさせる基点
となった。旧約聖書におけるすべての掟そしてすべての礼拝、祭儀はこの出来
事の想起のためであった、といっても過言ではない。自分たちがいまここに存

在しているのはその出来事によるのだというこの認識は繰り返し学び直され、絶えず教えつづけられなければならない。この学びは意味の知的記憶、伝達という次元を越えて彼らの倫理の実践を方向づけ、彼らの生にエネルギーを与えるものとなった。

この関連をより広いパースペクティブで簡潔に提示するのはG. ローフィンクである。彼は聖書中に三種類の言語形式が見られるという。第一は、『伝道の手紙』8、17-9、6に代表されるような「論証形式」である。そこではある問題が論究される。つまり、さまざまに考察が重ねられ、経験が伝えられ、比較がなされ、判断が下され、結論が引き出される。ここで使用される語の意向と形態は論証的である。第二は、『出エジプト』20、13-17に見られるような「勧告形式」である。そこではいかなる論究もなされていない。どんな考察もなされてはいないし、どんな判断も下されていない。ここにあるのは禁止事項の列挙であり、禁止の提示である。この場合の言語形態は勧告的である。さて、最後にもっとも重要なものとして取り出されるのは『申命記』26、5-6等に現れる「物語形式」である。

「私の父は、さすらいのアラム人でしたが、わずかな人数を連れてエジプトに下り、そこに寄留しました。しかし、そこで、大きくて強い、人数の多い国民になりました。エジプト人は、私たちを虐待し、苦しめ、私たちに過酷な労働を課しました。私たちが、私たちの父祖の神、主に呼びますと、主は私たちの声を聞き、私たちの窮状と労苦と圧迫を御覧になりました。そこで、主は力強い手と伸べられて腕と、恐ろしい力と、不思議とをもって、私たちをエジプトから連れだし、この所に導き入れ、乳と蜜の流れる地、この地を私たちに下さいました」

ここには、論証も勧告もなく、ただ物語がある。言語形態としては「説話的」であり、ある出来事が物語られている。ここでは謂わば神学的概念になる以前の、しかしそこからいづれ倫理的命題が生まれてくるはずの、そしてそれがいづれ厳密な神学的論証を要求するはずの、ある重要な体験が語られている。いづれにしても、聖書にみられる命令、禁止、勧告はこの物語に示されるある具体的な体験と切り離された形では意味を持ちえないことに留意しなければならない。

典型的な例として「安息日」の掟を挙げることができる。この掟の意味は、H. ヴォルフの言葉を借りれば、祭儀的な義務を強要するものではなく、根本的には「贈られた自由を思い出すこと」である。この思い出しが知的レベルのみでなく、礼拝祭儀の中で実際に祝われることを通じて体感的にも了解されて

ゆき、実生活を方向づけ、励ますこととなる。その意味で過去の出来事が、いまここに生き生きと立ち現れる。かのとき先祖たちを解放し、導き、救った神がいまここにも働き、そして将来にわたって必ず自分たちを導く、という確認の場、祝祭の中での想起がここにある。こうして想起は、もはや過ぎ去った過去にとどまらず、現在と将来にまで射程を伸ばすものとなる。その意味で旧約における「安息日の祝い」は絶えざる学習、伝達の場となるのである。

新約聖書においても基本構造は同じである。圧倒的に論証、勧告、命令、禁止が前景に出るパウロの神学論文といえる「ローマ人への手紙」でさえ、その中核はひとりの歴史的人物、キリストと信じられたナザレのイエスである。ここでは、想起の対象が、旧約の「出来事」との対比でいうなら、イエスという「人物」である。彼についてのデータではなく、彼自身が想起の対象となる。

「私の記念として、このように行いなさい」

(ルカ 22、19他)

「ダビデの子孫として生まれ、死者のうちから復活したイエス・キリストをいつも思い出していなさい。これが私の福音である」

(I I テモテ 2、8)

初代キリスト教は、旧約の「エジプト脱出」を想起させ祝わせる「安息日」をイエス・キリストの「復活」すなわち「復活したキリスト」に結びつけた。こうしてキリスト教の安息日、「日曜日」はイエスの生きた愛、イエスの中から溢れるエネルギーがまさしく「神から」のものであって、それはいかなる力、死にさえも打ち負かされることのないことを私たちに想起させ、祝わせ、現実を勇気をもって生きるよう励ます日とされたのである。日曜日毎の「ミサ、感謝の祭儀」がその本来的な想起の場であるといえる。この祭儀における「ことば」と「シンボル」によってこの想起が可能となる。といってもそれは自動的に生起するのではない。この種の想起は人間の主体的な意志と誠実さを要求する。なぜなら現実世界は必ずしも「神の」働きを窮わせるものではなく、むしろ不正と不条理の場とも見えるからであり、その中で世界を神が創造した「はなはだ良い」(創世記 1、31)ものと宣言し、「世界をよいものとして肯定し祝う礼拝」(J. ピーパー)の場に身を置くことは、身をもって信ずる信仰であるからである。だから、礼拝における想起はロマンティックな感傷とは同一ではない、非常にダイナミックな実在的想起とならざるを得ない。そしてその想起は涙のうちにありながら喜ぶことができる、というパラドックスをも可能とするであろう。

イエスは人に「罪のゆるし」を宣言して憚らなかつた。罪は個々の過ち、過失というより、人の中に巣くう悪へと誘う力を指している。罪が人を神から引き離す力とするなら、それはひとつの関係の破壊を意味している。関係が正しくないこと、それが罪であろう。神と人との、人と人との関係を根本的にゆがめるもの、それが罪であろう。とすれば、その「ゆるし」とは本来の関係の回復の宣言であるといえる。それは人間の功績によらずして与えられるものであり、そこから本当に生きる勇気が湧いてくるような経験であろう。イエスを想起するとは、端的に言えばイエスのように生きようとするのであろう。与えられる力によって。

神学は、他の学問と同様「学」であるかぎり、そのままの形では生身の人間には触れない。なぜなら「学」は一般化、抽象化をその特徴とするからである。しかし個々の人間は常に一般化されることを拒否し、分析されることで理解されることを拒む。そのような場合人間にかかわり得るものがあるとすれば、それは「礼拝共同体」としてのキリスト教であろう。想起の対象についての客観的分析や理論構築におわらず、想起の祝祭への参加によって学びを深めてゆく道がある。これが想起一礼拝による学び、であろう。

主な参考文献

- G. ローフィンク、「神学における『物語り』—福音書の言語上の基本構造」（酒井一郎 訳）、『神学ダイジェスト』47号（1979年）
24—35頁
- 赤木善光、『聖餐論』、自由が丘教会文庫 2（1981年）
- J. ピーパー、『余暇と祝祭』（稲垣良典 訳）、講談社 1988年

